

狂俳に見る妻の表現と女性観

（奥様・内義・御新造・噂・女房）

富田和子

はじめに

弘化四（一八四八）年刊行の高井蘭山の編集による『繪入女重寶記』^{（注1）}巻一の三に、「天子の御妻を女御・きさきといふ。大樹將軍の御臺所又は北の御方共云。祝言の夜、西枕北向に御寝なるゆゑの名也。大名の御前さま・奥さまと云。軽き武家に御新造、百姓のを御方又蘭鞋共云。下女には藁鞋をはかするといふ義なり。町人の内儀と云。内の儀則を治ると云こと也。下さまのを咄と云。子あれば子持といふ。揚屋茶屋のを火車といふ。花奢にてはあらでおそろしきといふの名なり。年寄ては嬭といふ。夫なくなりて後家共後室共いふ。寺方にて妙といひ、大黒と云。いづれもそれ／＼の品・くらゐ有てとなふる所もちがふなれば、こころばへ風俗までもちがひ有。：風俗とはたちふるまひの事也。」と見える。（句読点は富田による。以下同じ。）このように、当時使われた妻という立場を表現する言葉には、奥様・内義・御新造・噂・女房等があり、風俗・言動までも区別があった。

また、『守貞漫稿』^(注2)(嘉永六(一八五三)年概略)巻之四 人事に、「京坂の士民、奴婢より戸主の妻を称て、大小戸ともに奥様と云。…(守貞云、今世関西にも、御方と称す国を聞ず。東国はオカミサマ、京坂はオクサマ・オイエサマ、尾州はゴツサマ、御新造の略也。)」大坂の市民、主人の妻を、巨戸及び巫医等は京民と同じく、奥様と称し、中以下専ら御家様と云。」「江戸武家及び巨戸は、主人の妻を御新造様と称す。巫醫は小戸も称之。…中民以下は、御カミ様と称す。」「小戸の夫、己が妻を他に對て「カ、ア」と云。或卑て山の神と云。」「又、三都ともに戸主を亭主と云。…妻を女房と云。」等と見え、三都で妻の表現に相違がみられる。では、名古屋圏ではどうであろう。

ところで「雑俳は…いわば、民俗習慣の言語記録なのであり、…。口頭語は大衆生活の裏付けを持ち、當時に生きた人の息吹を写している。…即時即場の生きた言葉としての存在意義を主張している。雑俳様式は、中流以下にあつた人々の当時唯一の自由な発表手段だつた。…すべてが題詠様式となつていたことが、直接な発言形式から逃れ、傍觀的な第三者の態度をとらせた。世俗人情は写すが自分の主義主張ではないと、直接的な追求から解放される様式であつたため、本音を出しやすいという利点があつたと思う。(下略)」^(注3)と解説される。この雑俳に分類される狂俳の句に表現されたものは、特殊な個人の物の見方というよりも當時の平凡で一般的な捕らえ方と見るべきであろう。そこで、江戸時代後期に名古屋で発行された狂俳の撰句集の中から、當時の妻という立場にある女性たちの暮らしぶり等を窺うことのできる句を通して、実際に庶民が区別して使用した呼称の感覚的な差と生活の中の女性像を窺つてみたい。

とはいえ、少し時代は下るが、明治23年に発行された狂俳の撰集『俳諧皇国俳人全揃集』^(注4)の巻末名簿に載る人達は男性ばかりで、女性であると推測できる名前は見当たらない。当時、狂俳興行に女性が全く参加しなかつたわけではないが、女性の参加は少なかつた。これから取り上げていく句のほとんどが男性によつて作られた、言い換えれば、男性の目から見た妻像と言ふことができる。女性が女性の心を主觀的に詠つたのではなく、異性によつて客觀的に詠

われ表現されたということは、男性の異性に対する複雑な気持ちや見方を窺うことにもなるのではないか。

なお、女性が詠み込まれた句には、三つの種類がある。まず、女性を表す言葉、例えば、女・奥様・内義・御新造・囃・女房・後家・妾・姑・娘・姉・妹・下女・乳母・芸妓・女郎・瞽女などの言葉が題に使われているもの、また付句に出てくるもの、そしてこれら女性を表す言葉は題にも付句にも出ないが、句の意味が女性の習慣や態度・様子を詠んだと分かるもの。ここでは、特に妻という立場を表現する言葉の内、奥様・内義・御新造・囃・女房を題又は付句に含む句から考察を試みたい。

—

さて、ここで取り上げる奥様・内義・御新造・囃・女房の解説を、『日本国語大辞典』（小学館）から引いてみると、次のように載る。

奥様…「さま」は接尾語）公家の内室、大名の正室など、身分ある人の妻を敬って呼ぶ語。のちには上流の武家や富商の妻などにもいい、現在では広く一般に用いられる。奥御。奥。

内義・内儀…他人の妻を敬つていう語。近世、特に町家の妻に対していう。さらに敬つて「おないぎ」とも。内方。ないほう
御新造…②武家の妻女をさしていう語。妻をめとる時に居所を新造したところからいわれるようになったという。
ごしんぞ。③町家の富貴な家の妻女をいう。また、後にはふつう、他人の妻女、特に、新妻や若女房をいうのに用いた。ごしんぞ。

囃・母・嬢…①子が母親を敬い親しんで呼ぶ語。おとなが子の立場にたつて使う場合もある。次第に敬意は失われ

表Ⅰから、ここで取り上げた妻という立場を表現する五種類の言葉の総句数に占める割合は2.9%で多いとはいえない。が、この中でも「近世、下級階層で、妻をいう語」と解説される「囁」の登場する場合が多く、次いで「内義」「女房」が登場する。また、奥様・内義・御新造の題と句での出現の相違は、奥様が16句と7句・内義が83句と9句・御新造が31句と14句で、題に出された句の方が付句に利用される場合よりも多い。つまり、出題された題からの発想によって付句に利用され秀句となることが少なくなっている。庶民にとって身近な「囁」の暮らしぶりや行動が表現の対象となり易く、また選句された秀句が多くなることが窺われる。

次に句を引用しながら、実際に庶民が区別して使用した呼称の感覚的な差と生活の中の女性観を考えたい。

(1) 奥様

①他人の妻をやや上位の相手として詠んでおり、親しみを感じる存在として見ている例。

山気のある奥様

こちとらにさへ出て見へる

ナゴヤ 烏 夕 『太箸集』四編

*山気：(山師のような氣質の意) 投機や冒険を好む氣質。万一の幸運をねらって、思いきって物事をしようとする心。*こちとら：自称。「こちと」に複数を示す接尾語「ら」の付いたもの。男女ともに、対等またはやや上位の相手との語に用いる。現代では、ふざけた表現で用いる。

陽気な奥様

質も素人じゃ無かったり

士 閣 『たまかしわ』四編

町風ナ奥サマ

袖の質皺明鍋な

一 存 『たまかしわ』七編

*明鍋あけなべ：秘密の保てない人。あけすけ。

陽気な奥サマ

産見舞さへカン高な

一 斎 『たまかしわ』四編

陽気な奥サマ

祭りよばれる覚能ひ

市人『たまかしわ』四編

酸くさいゆかた

奥さま家鴨追ひ役な

蛙立『狂俳風見草』初編

開く切飯

奥さま軽い弁が出る

ぞんじ巻『狂俳風見草』二編

*切飯：型につめて押し、四角に切った携帯用の飯。

ゆがむ立テつけ

奥さま楊枝ねじ役な

相呼『狂俳風見草』二編

さばけた奥さま

上傳馬のも御存じな

二柏『千代見具佐』初編

*上傳馬：現在の豊橋市上伝馬町。吉田宿の遊郭の一部をなす。

お出入のおよし

奥さまの耳かりに来る

水瀬巻『狂俳鉄くまで』

②他人の妻をやや上位の相手として対しているが、敬意を伴わない例。

藪医者の奥様

泣のが顔に見えて居る

紫川亭『太箸集』四編

藪医の奥様

顔に似合ぬ噂ある

一木『続太はし集』二編

御楽人の奥様

おそろしい程紅が濃い

花樽竹馬『狂俳天狗七部集』

*楽人：生活の苦勞のない人。気楽にくらす人。

奥サマ達

花合ニハ膽太な

大トキ 梧窓『たまかしわ』初編

*花合：花札を使つてする遊び。同じ月の札を合わせ取り、できた役と取った札の点数を競う。

乳母から居ハった奥サマ

有つたに葛籠ツツさつぱりな

よしな、『たまかしわ』七編

能ウ肥た奥サマ

位イニッて来てじゃげな

壽扇、『すゞしろ集』

*位をニる：ある官位を降る。

奥さまの内證

権助お居間迄通る

花 楽 イヌキ 『かがみぐさ』

表Ⅰの23句中、17句を引用した。ここでは、①出て見へる等の敬語表現の他、①カン高な・追ひ役な・ねじ役な・御存じな・②膽太な・さつぱりな・来てじゃげな等、語尾を断定せず、「な」という押念のための一種の詠嘆表現が多く見られる。当時の狂俳の句に表現されたものが、特殊な個人の物の見方というよりも当時の平凡で一般的なとらえ方であるとはいえ、ここに見られる奥様と呼ばれる女性達には、微笑ましく好意的にとらえている句が多い。

(2) 内 義

①他人の妻を好意的にとらえた例。

すいな内義

好な貰もやめて居る

雨 水 『続太はし集』初編

綺麗な台所

ちさいお内義出て見える

五 鹿 『続太はし集』二編

茄子壳

お内義の手を押のける

呂 江 『続太はし集』三編

氣の利た内義

仕合もの、様子なり

桂 意 『すゝしろ集』

哥讀内義

春ハ山サト言ハしたり

玉 葉 『千代見具佐』初編

掃出す座敷

内儀呼つて針渡す

小茂井、 『狂俳指使篇』

②町家の妻を詠んだ例。∴好意的とばかりはいえない。

紅屋の内義

出かけの形リで店助る

ナゴヤ
多 草 『太箸集』三編

貰やの内義

妹頼んで遣つとる

立 古 『続太はし集』初編

関取の内義

爰らの多ばこ氣に入らぬ

月 窓 『続太はし集』二編

廻船問屋

お内儀ぐるめ角力好ナ

茶屋の内儀

よう黙らせず子を返す

ミどり屋の内義

ドモ成らぬ時ア筒も有

*筒：つつもたせ（美人局）の略。

③芸妓など玄人出身を感じさせる例。

美しい内義

在所聞てもいはつせぬ

片鬢兀た内義

まだ巾廣むすばれる

片鬢兀た内義

赤襟式人連て行

*赤襟：（赤色の半襟をかけたことから）少女。特に年若い芸妓、半玉の俗称。

片鬢兀た内義

出歩行連はきまつとる

片鬢兀た内義

ま、子をエロウ可愛がる

片鬢兀た内義

余所の子見るとけなりがる

*けなりい：珍しく羨ましい。

片鬢兀た内義

今頃産で持ちかねる

*持ちかねる：持てあます。

④内義の性格又は性癖を表す例。

気のよい内義

頼まれた事忘れとる

入れたての内義

砂糖片薄ふきらつせる

ツシマ

里尉

『たまかしわ』初編

チタスヘヒロレン

一菊

『たまかしわ』初編

始孝

『たまかしわ』七編

花泉

『続太はし集』二編

寿肪

『潮の花』

紫泉

『潮の花』

呂溪

『潮の花』

玉里

『潮の花』

双宇

『潮の花』

都夕

『潮の花』

清賀

『続太はし集』初編

清賀

『続太はし集』初編

*入れたて：自分で費用を負担すること。自弁。自前。自分持ち。

派手な内義

子を抱事も嫌ひ也

某卷

『太箸集』三編

早口なお内義

旦那の留守にや脈も見る

大野

『続太はし集』三編

しみたれの内義

いやそうにして飯をくふ

国府宮

『太箸集』四編

骨折て

御内義とろゝぎらひ也

雨扇、

『太箸集』初編

度量自慢の内義

旦那様には水くさい

烏夕

『続太はし集』三編

鼻高な内義

明かるしといて咄される

白水

『続太はし集』初編

頭痛持の内義

手も通さぬの着てかれる

桂子

『続太はし集』初編

頭痛持の内義

内の借金知らつせぬ

道光寺連^{三西尾}

『たまかしわ』四編

施し好の内義

来てから欠伸しづめ也

直花

『続太はし集』二編

内儀のさし出口

豆腐かたべらこがらかす

太平

『狂俳指使篇』

*かたべら：片面。

さばけて居ル内義

お膳の間々跨で行

市存

『たまかしわ』四編

前の表Iにした内義92句中、32句を引用した。この中には①に出て見える・言ハしたり・③いはつせぬ・むすばれる・④さらつせる・咄される・着てかれる・知らつせぬ等の敬語表現が見られる。が、①粋な・気の利た・③美しい・④気のよい等の好意的な修飾語を冠せた内義ばかりではなく、③片鬢兀た・④しみたれの・度量自慢の・鼻高な・頭痛持ちの等という非難めいた修飾語を冠せた内義が見られる。ここに見られる内義とよばれる女性達に対して、他人の妻としての敬意は窺われても、好意的に表現した例は少なく、表面的でよそよそしい。

(3) 御新造

① 富裕な家の美しい妻女を彷彿させる例。

気のさばけた御新造

穢れたこゝろ更に無い

秋のゆふべ

御新造木魚叩イとる

代参に遣る日雇

御新造に酌仕て貰ふ

② 富裕な家の妻女を詠んだと窺える句。

サア御座れ

御新の結び好キア下女徳ナ

* 結び好キ…髪結好き

其尾につき

乳母御新造の角殖す

千本まいら

御新造ぐるめさわいどる

* 千本舞良…縦横の棧を細かい間隔で数多く付けた舞良戸。

③ さばけた性格の御新造の例。

太とられた御新造

黒痣^{ホシロ}ぬかして運ひらく

角屋の御新造

鬼門^{トカメ}崇で片眼無い

日参の御新造

起たばつかの所へよる

先まくり

御新造サマにケイドくう

* ケイド…「けいどう」

の変化した語) 邪魔が入ること。さまたげ。

憎めぬ御新造

強入て置て這入られる

木佳 『続太はし集』二編

芝青 『狂俳潮の花』

ハタヤ^{アツク} 『続太はし集』三編

喜楽 『狂俳風見草』二編

南鐔、^{井ホリ} 『太箸集』初編

里生 『太箸集』五編

三 雲母連 『たまかしわ』二編

里曠 『たまかしわ』四編

ナゴヤ 『太箸集』四編

壽扇、 『すゞしろ集』

太葉 『続太はし集』初編

すけべの御新造

鬢へ梅干いざつとる

古門 『狂俳指使篇』

* いざる…物が、置かれた場所からずれて動く。

玄人兒の御新造

奥の賣子へ揚ったり

山芝 『たまかしわ』 四編

そふか知らん

なんでやか塗ッせる御新な

スナバ 花春 『冠句清蘭集』 初編

浮た氣の御新

赤うらまくる足白イ

スナバ 山風 『冠句清蘭集』 初編

* 赤うら…衣類などの裏地の赤いもの。紅裏。もみうら

表1の45句中、秀句として選句された句の内の15句を引用した。ここに挙げた御新造に、奥様や内義に見られた敬意の対象となるような特色は窺い難く、辞書に見られた「特に、新妻や若女房をいう」に該当する句は少ない。

ところで、『狂俳角力十評』に「内義と御新造」の題で集句された22句が載る。『雑俳集成』に載る里瓶評では無印なので、里瓶は秀句としなかったものであるが、両者を区別した例が見られるので、いくつかを引用する。

内義と御新造

すじかいに連れだつて行く

はいとへいとの返事也

御義理かとふて風呂が明く

絹と木綿で腕をふく

鬼門と鬼門返し也

両者の区別を意識した句が選句されなかったのは、ありふれた発想の句を好まなかった選者の考え方に寄るものともいえるが、既に御新造と内義の使用区別に混乱があったとわかる。

(4) 嚏

①家計を含めた経済活動を嚏の力量に頼る例。

植木店

初手にはお嚏出してこす

古手店

二口めには嚏が出る

誠らしう

借なよくりに嚏が出る

商ひ上手の嚏

手に片かなが式字見へる

懸引上手

断る懸ケにや嚏遣ふ

新世帯

お嚏の智恵が半分添ふ

くるしい晦日

お嚏の智恵もやしまれぬ

*やしむ…あなどる。軽く見る。

手枕

お嚏の知恵で晦日越

嚏の思案

冬物二つ質にやる

嚏と相談

惜ひ物置思ひきる

使の欠伸

嚏の仕廻た鍵搜す

ゐざくって

嚏のかけ合聞て居

*かけ合…要求などを話し合うこと。談判。交渉。

②叱る嚏の例。

はげしい嚏

亭主巨燵へばい入れる

寿峰『太箸集』五編

大サト 呂溪『太箸集』三編

ナゴヤ 如雷『太箸集』四編

松塘庵芝仙『狂俳天狗七部集』

チタ大 春暁『狂俳風見草』二編

大天 春花『太箸集』四編

巴光『続太はし集』三編

仁所 珠の家『たまかしわ』初編

イ山『続太はし集』初編

上末 一情『たまかしわ』二編

東居『続太はし集』二編

花友『太箸集』三編

鶴斎『太箸集』二編

③ 鼻に対する夫の内心を詠んだ例。

はげしい鼻	蚊に癩癩をおこす也
大不足	湯をつかはれた鼻がなる
やかましい鼻	居るのを恩のやうにいふ
蹴まくられる鼻	言張る口が違つたり
負ぬ気で	叩かれる迄鼻しゃべる
訳もいはず	鼻が藪から棒を出す
おんぴりぴん	誘ふに鼻のきいて置ケ
お鼻に呵られ	いくつか有ルニ徳利買ふ
鼻ニピリく	元の簞笥にや仕て遣れぬ
鼻に対する夫の内心を詠んだ例。	
心の儘	鼻の留守中楽をせる
迎なら	鼻も新らしして見たい
時行節	どふもお鼻が替と成
さればとて	道具ばかりの鼻ぢやない
ちからない事	醒たらお鼻去てある
近所へ極内	能ふ出て行鼻戻ッとする
腹存分	禁酒も極めて鼻戻る
苦にもせず	鼻の異見を聞寝入

鶴 斎	『太箸集』二編
福 島	『太箸集』四編
霞 丈	『太箸集』四編
一味斎	『たまかしわ』三編
花 月	『太箸集』二編
玉 井	『続太はし集』二編
市 友	『狂俳風見草』二編
初 風	『たまかしわ』五編
只 琴	『たまかしわ』五編
起 宿	『太箸集』五編
盛 花	『狂俳不知足』
馬 遊	『十評』
吾嬌菴	『狂俳不知足』
水魚園	『狂俳風見草』初編
錦 木	『狂俳潮の花』
青 柳	『たまかしわ』三編
兎 月	『狂俳不知足』

④ 夫婦愛を示す例。

菊作る家

鼻と二人

若亭主

鼻を起し

草鞋がけ

田植布子

心祝ひ

泥足を拭ひ

不孝者

⑤ 鼻の生態の一面を示す例。

産月の鼻

産月の鼻

生皮鼻

草鞋とき

塗りすえてゐる鼻

どてら着た鼻

387句中、45句を引用した。

今だに鼻が美しい

鉢から香物はさむ

鼻の法花に迷はれる

懺悔の氣持わるうがる

鼻から入れて焚て遣る

寝とるお鼻へ素湯持て行

留守に鼻達酔て居る

癪で舞つとる鼻さする

痒がる鼻さ見殺しな

ごわぐを着て涼しがる

摺むくやうなやつ着とる

一てうら着て出て往れる

何所へうせたか鼻さがす

お人があると亭主呼ぶ

おぼへがあるか妓に慈悲な

①では家計を含めた経済活動において鼻の力量が頼りの様子、②では鼻に叱られ、また

冬 春 『狂俳潮の花』

夜更連 『太箸集』 三編

月都軒 『続太はし集』 二編

百度 『太箸集』 四編

白壁連 『太はし集』 二編

勝 幡 『続太はし集』 三編

大里村 『太箸集』 五編

一 應 『たまかしわ』 三編

二 泉 『冠句清蘭集』 二編

雪 村 『太箸集』 二編

耕 々 『続太はし集』 初編

某 卷 『太箸集』 三編

烏 夕 『太箸集』 四編

鶴 斎 『続太はし集』 初編

柳 子 『狂俳指使篇』

叱られないよう意見を聞く様子、③では題から、家庭内での立場や影響力を想像させ、④では労りの気持ち、⑤ではその時々々の生簠などが窺える。いずれも噂を気楽に表現している。

(5) 女 房

①女性上位の例。

珍らしい

女房亭主に負て居る

くそやけに成り

毎日女房遊んどる

やけクソに成り

女房毎日肴喰ふ

遊ばせて置女房

こふ暑てはといわれたり

一ぱいきげん

女房にお辞宜しられたり

した、か骨折

女房の留守にのし搜す

くらい締

女房に遣ひ錢いぢる

女房に呵られ

手で撫くつて腰かける

姉女房

角の寝てをる隙はない

姉女房

握つとつたで茶や廻る

②女房の生簠を示す例。

愚痴をいふ女房

在所は絶て仕廻たり

幽霊女房に持

先住かなし見てござる

雪村、
『太箸集』初編

無尺舎
『太箸集』五編

素月
『狂俳潮の花』

清賀
『続太はし集』初編

山崎
『太箸集』五編

飯盛、
『太箸集』初編

柏翠、
『太箸集』初編

雪村
『太箸集』二編

柏翠、
『太箸集』初編

里橋
『狂俳風見草』二編

雪村
『太箸集』二編

清賀
『続太はし集』初編

天竺に女房を持ち

帰つて来ては寒ふがる

士專『続太はし集』二編

天狗サマの女房二成り

私し等にや鼻であしらいる

理玉『たまかしわ』六編

夏菊

女房に酒のあひさせる

一俵『狂俳鉄くまで』

茶碗酒

女房も少し旅馴た

秋溪『狂俳冠句壺編』

夫としらず

女房影膳居へておく

鬼丸『狂俳鉄くまで』

酔て体なし

女房の名で姫呼る

里水『狂俳くれたけ集』

瘦たがる女房

すゝめる灸がきらひなり

虻鳴『続太はし集』二編

弱ひ女房

おみくじ好きで気が迷ふ

坦々『続太はし集』三編

亭主より大きい女房

両が恥かしがらつせる

耕夫『続太はし集』三編

請出し女房

引摺る裾で算ン消やす

一蝶『たまかしわ』五編

請出し女房

帯引ずつて継場退く

守一『たまかしわ』七編

53句中、23句を引用した。①では封建社会にもかかわらず、結構女房が亭主の上に立ち、支配力を持っていた例。

②では女房の種々な行動をとらえている。この②の幽霊女房に持・天竺に女房を持ち・天狗サマの女房二成りといった荒唐な形容の仕方は女房にのみ見られた。これは、他の奥様・内義・御新造・囃よりも、気楽にたのしんで使われたためである。女房という言葉は他の四種類の言葉より一般的で使用範囲が広い。

ま と め

ここで見てきた句は、冒頭で述べた通り、女性が女性の心を主観的に詠ったのではなく、異性によって客観的に詠われ表現された男性の目から見た妻像で、平凡な捕らえ方による句作りがなされたものがほとんどであった。女性の行動や考え方の中にきらりと光る部分をうまく表現できているとは言い難い。が、このようなとらえ方の中でも、江戸時代の庶民の女性が、元氣であったことは窺える。『江戸の繁盛しぐさ』^(注7)に「実際、町衆の天下であった江戸の町は活気に溢れて明るく、男も女も生き生きしていたという。：特に江戸は女性の天下であったようだ」^(注8)「江戸の町では『女は人のはじまりのこと』、つまり子供を生み育てる重要な役割をもっている」とされ、主婦の座は想像以上に強かったと言う。：銭湯の男湯ではカカア自慢の亭主がお互いに競い合い、その自慢の内容によって居場所が決まった。自慢気のない女房を持った亭主が良い場所にいると、その座を追われたという」^(注9)「『農家は男次第、商家は女次第』といわれた。：商業には女性の助言やマネジメントが有効だった。旅籠、料亭の女将がとりしきることが多く、その手腕が経営の成否を左右した。商家の繁栄は嫁の力量次第だから嫁をもらう場合は心して選べといった」^(注10)とある。本稿では妻という立場の女性を詠んだ狂俳の句を見てきたが、女性が頼りにされたのは、江戸の町ばかりでなく、東海地方にも共通する傾向と考えてよいであろう。

与謝野鉄幹の「人を戀ふる歌」^(注11)は「妻をめとらば才たけて 顔うるはしくなさけある」で始まる。既に近代に入ってから詩であるが、「才たけて」と望むのは、妻という女性と対等でありたいという願いがあつてのことではないか。フェミニズムという言葉が、「近代的なあらゆる制度において男性支配／女性抑圧の構造の变革を迫り、女性解放を

求める^(注12)運動を意味するというが、少なくとも江戸時代後期にあっては、生活の中での女性の立場は抑圧構造の下にあったと言うよりも、現代に通じる活気を感じる。

ところで、本稿で引用した句の中でも、女性を冷やかしからかうような句が多かった。これに対し、女性が男性の行動や考え方を表現した場合どのような作品になったであろうか。

(平成五年十月)

注

- (1) 田中ちた子・田中初夫編『家政学文献集成』江戸期Ⅱ(渡辺書店 昭41) 一一三頁 卷一の三「女しなさだめ」より。
- (2) 朝倉治彦編『守貞漫稿』上巻(東京堂出版 昭48年初版・昭56年再版) 五六・五七頁
- (3) 鈴木勝忠著『近世俳諧史の基層』(名古屋大学出版会 平4) 八頁 序より。
- (4) 「明治前期名古屋狂俳の変革」41頁(『椋山國文学』一三三号)に、現行の市町村区分で分類して掲載した。
- (5) 鈴木勝忠編『雑俳集成』第一期12「天保名古屋狂俳集」東洋書院 昭60
- (6) 鈴木勝忠編『雑俳集成』第二期10「名古屋幕末狂俳集」私家版 平4
- (7) 越川禮子著 日本経済新聞社発行 平4
- (8) 六四頁
- (9) 一三六頁
- (10) 一四二頁
- (11) 『日本近代文学大系』53巻「近代詩集Ⅰ」(角川書店 昭47) 一三七頁
- (12) 石原千秋「フェミニズムの現在」(『別冊國文学』No.44 新・現代文学研究必携 二三五頁 學燈社 平4)

付 記

平成五年度名古屋市守山社会教育センター主催講座「女性と家庭ライフデザインを考える」第九回担当分の講義録をもとにまとめました。